

## 特集に当って

一楽 信雄

「人間行動」については、心理学あるいは社会学を専攻する者でなくとも、人知に興味のある研究者であれば、一度は関心を抱く対象であろう。しかしながら、これを正面からとりあげるには、一般的にあまりにも乗り越えるべき壁が大きいように見え、伝統的な研究方法の中に安住する安易な道を選びがちである。

本号で特集した6篇の研究は、基本的な人間行動を、これまでの行動主義心理学に端を発する研究の流れと、意思決定論やゲームの理論に代表されるような情報科学的接近による流れ（これらはそれぞれ独立に研究がなされてきた）を包含する統合的な方向でとらえ、これをオートマトンの形式で記述することを試みている。これによって、これまで扱にくかった質的要因(心の状態など)をモデルに組み込むことを可能にし、幾多の問題への適用可能性を示唆している。

ここに収めた各研究成果は、その最初の松田正一先生（早稲田大学システム科学研究所教授）による「人間の行動モデル」に示されている基本的フレームワークにもとづいて、それぞれ具体的な場面への適用を試みたものであり、執筆者は永年の松田先生の研究所における活動を通して直接薫陶を受けている方々である。各自の専攻領域がさまざまであるために、今日までこのように一堂に会する形での発表の機会はなかった。このような事情を勘案し、本号の特集のための執筆をお願いしたものである。

五百井清右衛門氏による「集団の構造と成員の

行動特性」では、集団構造の変化をモデル化するに当って、社会心理学におけるバランス理論と、グラフ理論を援用し、集団成員の内部状態と集団構造との関係を示している。

高木亮一、堀良の両氏による「商業ゾーンの変容過程モデル」は、マーケティングを専門とする立場から、都市における商業ゾーンの変容を、欲求構造の相違によるいくつかのタイプの商業ゾーン経営主体の、みずからのゾーンに対する ideal image の実現過程を表現するモデルによって説明しようとしている。

土方正夫氏の「農業集落の変容過程と人間行動モデル」は、地域問題を手がける立場から、農村変容の最小サブシステムは農業集落として把握されるとの観察から「松田モデル」の枠組にもとづいてモデル構築とシミュレーションを行なっている。

位寄和久氏の「建築空間における人間の行動モデル」は、標題の通り、展示場のレイアウトの評価に行動モデルを利用することを試みたもので、環境条件と人間の内部状態の変化による集団行動の変容をとらえることにより、防災問題などへの応用の可能性へとつなげている。

佐藤滋氏による「市街地の変動状態とその遷移過程のモデル」は、都市計画を専門とする立場から、「松田モデル」の深層構造をとり込んだ形式で、過去の市街地変動を説明できる条件を設定し、予測に役立ちうるかどうかを検証しようとした研究の一部の紹介である。

以上のほかにも適用対象となる分野は多くあると考えられ、他の専門の方々からの参加によって今後さらに実り多い成果が期待されよう。

いちらく のぶお 武蔵大学